

江戸時代までの暦をみます

江戸時代の時代小説、歴史小説を読みますと、^{こよみ}暦では、何月何日（太陰太陽暦）とは別に^{きのえね}甲子とか^{ひのえうま}丙午等の^{じっかんじゅうにし}十干十二支（干支）それに冬至、立夏等の^{にじゅうよん}二十四^{せつき}節気で1年の時期を表します。

小説では当時の暦と時刻表示をした場合、それを現在の何月頃とか現在の何時頃と注釈を入れてくれることもあります。ない場合も多々あります。当時の暦と時刻の数え方や表示が現在とどう違うのか分かっていますと、場面のリアリティが鮮明となり、一層面白く読めることになると思います。

今回は昔の暦について見てみましょう。時刻については別稿とします。

ここで突然ですが、赤穂浪士の討ち入りの年月日は現在の暦ではいつかです。元禄15年12月14日の夜半か15日の未明と言うべきか定まっていませんが、14日は現行暦では翌年の1月30日に相当します。

このように当時の暦と現在使用の我々の暦とはこのように月が一致しません。今回は江戸時代まで使用されていた暦を見ます。キーワードは「太陰太陽暦」、「節気」、「和暦」、「春夏秋冬」です。

それは今日使用の暦は明治から使用の太陽暦（新暦）で、江戸時代までは太陰太陽暦（旧暦）によるものだったからです。

太陽暦は地球が太陽を一周する日を365, 2422で、これを1年として12（カ月）で割って1か月を30日の月と31日の月と28日の月そして4年に一度閏年をもうけて1日増やします（2月は29日にする）。

これに対しまして太陰暦は月の満ち欠け、即ち新月一満月一新月を1か月にします。1か月は29, 53日で実際には月は29日（小の月）と30日（大の月）にして、1年12カ月で354、36日となります。

太陰暦は毎日月を見ていると月初めと月の終わりが分かります（新月で月が見えない）又途中は月がだんだんふくらみ、月の真ん中（15日ぐらい）が満月でその後はしぼんでいき又新月（暗闇）になっていきます。新月と満月、満月と新月の間は上弦の月（☾）、又満月と新月の間は下弦の月（☽）でおおよその月の日にちが分かります。

太陽暦では1年365、2422日を機械的に12で割りますので、今何月の何日かはカレンダーがないと分かりません。

字の読めない庶民を多くかかえる昔は太陰暦の方が便利なのです。月を見ていけば大体の日にちが分かりますから。

しかし太陽暦では季節が分かります。

地球は太陽に対して傾きがありまして、すり鉢をすりこぎ条に回っている感じなので、規則的に春夏秋冬ができます。

一方太陰暦では月と地球との関係から1か月と1年を生み出します(354, 36日)と1年の日にちが太陽を1周の日(365、2日)との差から毎年月と季節との差が出て、ついには正月が真夏になってしまい、7月が真冬になってしまことがあります。

赤道近くに居住の人々は地球の傾きに関係ないことからもともと春夏秋冬はありませんから、この太陰暦よいのですが、春夏秋冬の下で農作業を営む国(中国や日本)ではこれでは困ります。

そこで太陽暦も取り入れて太陰太陽暦としたのです。

具体的には、太陽暦と太陰暦との1年の日数の差(約10、9日)を埋めるために2~3年一度閏月を入れて、1か月増やし、1年を13か月として調整して、月と季節を合わせるようにしました。

したがって小説で例えれば閏4月とか閏11月とか出てきましたら、それは太陽暦での季節に合わせるために1か月増やす年なんだなと理解してください。

何年の何月に閏月を入れるかは数カ月前に決めていたようです。

しかし農作業(田植えや稲刈り等の時期の設定)には更に詳しい季節が必要となり、太陽暦を使用して二十四節気が生み出されました。

一年で夜が最も長い、あるいは一年で正午の太陽による物の影が一番長くなる日を冬至(11月中気)を基点にして、一年間(365日)を24等分して順次小寒(11月節気)、大寒(12月中気)、立春(12月節気)、雨水(1月中気).....小雪(10月中気)、大雪(10月節気)として季節を一層明瞭にしました。(添付別紙1に二十四節気全名称)

更に季節を明確にするために雑節も設けました。今日でもよく知られるものとして、

八十八夜(立春から88日目、太陽暦の5月1~2日頃、播種の適期、茶摘みの最盛期)

入梅(太陽暦では6月11日頃)

二百十日(立春から210日目、9月1日頃)

次に暦と言えは和暦（年号）でしょう。

日本で初めて和暦が使われたのは大化（645～649年）で以降今日の平成まで続きます。それ以前は中国の年号を使っていました。

暦の設定は古来朝廷の仕事です。武士の世になっても形の上では朝廷が決めます。

年号名は江戸時代以前は、天皇の代替わりや不吉なことが続きますと変えましたが、幕府も自分の都合で変えさせました。

古代、中世では年号の変更は地方では変わったことが長く知られず、又地方政権が変更を認めない等年号が徹底しないことがありました。

そこで年の特定のために年号に合わせて十干十二支（干支）即ち六十干支ろくじゅうかんしが使われました。

今でも丙午ひのえうまとか還暦かんれきとか言って使われます。歴史用語としては壬申じんしんの乱（672年）、戊辰戦争ぼしん（1868年）とか言って年を特定します。

十干じっかんと十二支じゅうにしを組み合わせて60年を1周期として各年を読みを特定します。

「甲子（きのえね・コウシ（カッシ））—乙丑（きのとうし・オッチュウ）—
「丙寅（ひのえとら・ヘイイン）」—「丁卯（ひのとう・テイボウ）」—「戊辰（つちのえたつ・ボシン）」・・・・・・・・

最後は60番目の癸亥（みずのとい・きがい）」でそして又最初の「甲子」に戻ります。

十干はいわゆる甲こう・乙おつ・丙へい・丁てい・戊ぼ・己き・庚こう・辛しん・壬じん・癸きの10を数えます。番号です。

十干は五行（中国では古く自然界を構成しているもの）との関連で作られています。五行は木もく（き）・火か（ひ）・土ど（つち）・金きん（か）・水すい（みず）ですがこれに兄え（え）と弟と（と）を組み合わせて10を数えます。

十干じっかんは最近甲乙丙ぐらいしか使いませんが、十二支はすべてなじみがありますね。俗に言う“えと”です。子しから始まり、亥がいで終わります。合計12あります。（本当は“えと”は十干（兄と弟）の方でしょうが）

十干と十二支そしてこれを組み合わせた六十干支（干支）の順位表は別紙2をご参照願います。

きのえね ^{みずのとい} 甲子から 癸 亥まで全部で60あります。後は甲子に戻ります。60年周期です。よって数えて61歳の人を還暦と言います。(満60歳、数えて61歳で還暦です)

女の人が嫌がっていた「^{ひのえうま}丙午」生まれは43番目にあります。60年に一回です。(この年生まれは、夫を殺すとの江戸時代からの迷信があります。)

それから春夏秋冬の季節分けと暦の月は江戸時代までは決まっていました。春は1~3月、夏は4~6月、秋は7~9月、冬は10~12月です。

現在より早いですが、太陰太陽暦は現在より約1か月程度早いので、1月が現在の2月で、4月は5月で、7月は8月で、10月は11月ごろと思ってください。当時の暦(太陰太陽暦)と現在の太陽暦と差が何日ぐらいかその月で変わります。大体15~45日ぐらいでしょうか。前述のように赤穂浪士の討ち入りの時は当時の暦では12月14日で今日の太陽暦では翌年の1月30日にあたります)

お正月の挨拶に「新春のお喜びを申し上げます」は正月が春の初めだからです。

時代小説で出てくる月は現在暦では1か月後と換算すればおおよそ間違いのないと思います。

江戸時代まで使われて来ましたが太陰太陽暦(旧暦)は明治5年から現在の太陽暦(新暦)に変わりました。

今日的に見れば太陽暦一本の方が便利のような気がしますが、月の満ち欠け、即ち新月・上弦の月・満月下弦の月から又新月が一カ月は分かりやすく、日本も中国も太陰暦は捨てがたかったのでしょう。日本では明治の初めまで続きました。

今は中国も太陽暦ですが、旧暦の正月を旧正月(春節)(約1か月遅れ)として祝っています。

以上

2017年2月1日

梅 一声

添付別紙 1

二十四節気

冬至	1 1 月中気	穀雨	3 月中気	処暑	7 月中気
小寒	1 1 月節気	立夏	3 月節気	白露	7 月節気
大寒	1 2 月中気	小満	4 月中気	秋分	8 月中気
立春	1 2 月節気	芒種	4 月節気	寒露	8 月節気
雨水	1 月中気	夏至	5 月中気	霜降	9 月中気
啓蟄	1 月節気	小暑	5 月節気	立冬	9 月節気
春分	2 月中気	大暑	6 月中気	小雪	1 0 月中気
清明	2 月節気	立秋	6 月節気	大雪	1 0 月節気

注 節気は中気と節気と二つの名称を交互につけます。

添付別紙 2 六十干支順位表

(1) 十干^{じっかん}

甲	きのえ (木兄) ……日本語読み (以下同じ) コウ ……漢音読み (以下同じ)
乙	きのと (木弟) オツ
丙	ひのえ (火兄) ヘイ
丁	ひのと (火弟) テイ
戊	つちのえ (土兄) ボ
己	つちのと (土弟) キ
庚	かのえ (金兄) コウ
辛	かのと (金弟) シン
壬	みずのえ (水兄) ジン
癸	みずのと (水弟) キ

注 ひらがなは日本語読み（木火土金水を兄と弟に分ける）
カタカナは漢音読み

(2) 十二支

子（ね・鼠・シ） 丑（うし・牛・チュウ） 寅（とら・虎） 卯（う・兎・ボウ）
辰（たつ・龍・シン） 巳（み・蛇・シ） 午（うま・馬・ゴ）
未（ひつじ・羊・ビ） 申（さる・猿・シン） 酉（とり・鳥・ユウ）
戌（いぬ・犬・ジュツ） 亥（い・猪・ガイ）

(3) 十干十二支（干支）の順位表

きのえね 甲子 コウシ(カッシ)	きのとうし 乙丑 オツチュウ	ひのえとら 丙寅 ヘイ イン	ひのとう 丁卯 テイボウ	つちのえたつ 戊辰 ボ シン	つちのとみ 己巳 キ シ	かのえうま 庚午 コウゴ	かのとひつじ 辛未 シン ビ	みずのえさる 壬申 ジン シン	みずのととり 癸酉 キ ユウ
きのえいぬ 甲戌 コウジュツ	きのとい 乙亥 イツガイ	ひのえね 丙子 ヘイ シ	ひのとうし 丁丑 テイチュウ	つちのえとら 戊寅 ボ イン	つちのとう 己卯 キ ボウ	かのえたつ 庚辰 コウシン	かのとみ 辛巳 シン シ	みずのうえうま 壬午 ジンゴ	みずのとひつじ 癸未 キ ビ
きのえさる 甲申 コウシン	きのととり 乙酉 イツユウ	ひのえいぬ 丙戌 ヘイジュツ	ひのとい 丁亥 テイガイ	つちのええ 戊子 ボ シ	つちのとうし 己丑 キチュウ	かのえとら 庚寅 コウイン	かのとう 辛卯 シイボウ	みずのえたつ 壬辰 ジン シン	みずのとみ 癸巳 キ シ
きのえうま 甲午 コウゴ	きのとひつじ 乙未 イツビ	ひのえさる 丙申 ヘイシン	ひのととり 丁酉 テイユウ	つちのえいぬ 戊戌 ボ ジュツ	つちのとい 己亥 キ ガイ	かのえね 庚子 コウシ	かなとうし 辛丑 シンチュウ	みずのえとら 壬寅 ジンイン	みずのとう 癸卯 キ ボウ
きのえたつ 甲辰 コウシン	きのとみ 乙巳 イツシ	ひのえうま 丙午 ヘイゴ	ひのとひつじ 丁未 テイビ	つちのえさる 戊申 ボ シン	つちのととり 己酉 キユウ	かのえいぬ 庚戌 コウジュツ	かのとい 辛亥 シンガイ	みずのえね 壬子 ジンシ	みずのとうし 癸丑 キチュウ
きのえとら 甲寅 コウイン	きのとう 乙卯 イツボウ	ひのえたつ 丙辰 ヘイシン	ひのとみ 丁巳 テイシ	つちのえうま 戊午 ボゴ	つちのとひつじ 己未 キビ	かのえさる 庚申 コウシン	かのととり 辛酉 シンユウ	みずのえいぬ 壬戌 ジンジュツ	みずのとい 癸亥 キガイ

注 上段は日本語読み、下段は漢音